



ルー
テル

藤が丘だより

発行 月報委員会 発行日 2021年7月4日

№. 86

主の慈しみは決して絶えない。／主の憐れみは決して尽きない。
それは朝ごとに新たになる。

哀歌 3章22-23節a



礼拝献花より

御言葉に生きる

あなたの御言葉は、わたしのものとなり わたしの心は喜び躍りました。

エレミヤ書 15章16節b

ルーター派キリスト教会 日本福音ルーテル藤が丘教会 牧師 佐藤和宏
〒227-0043 横浜市青葉区藤が丘 2-31-21 tel 045-973-2729/ fax 045-439-7009
URL:<https://www.jelc-fujigaoka.org/> mailto: fujigaoka@jelc.or.jp



シリーズ説教

『あなたに出会う神』

牧師 佐藤和宏

哀歌3章22節～33節

「哀歌」という表題は、ヘブライ語で「どうして」と訳される言葉なのだそうです。哀歌3章だけはセレウコス朝による宗教的迫害の時代に著されたと考えられています。迫害の時代における大きな困難に直面して、「どうして」と人々の口から問いが発せられたのだと想像できます。

ところが、そのような大いなる苦難の中にあつて著された哀歌3章にあつて、今日の日課は次のように始まつているのです。「主の慈しみは決して絶えない。／主の憐れみは決して尽きない。／それは朝ごとに新たになる。」

直面した苦難が過去のものとなつて、安堵した人々がこのように感謝しているではありません。苦難の中にある人々が不安と恐れの中で確信しているのです。迫害の中にあつて、人々は「どうして」と叫ばずにはいられなかったことでしょう。しかしそのような中であつて「主の慈

しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない」と、口にしていくのです。この変化に当初、神を自分の期待に応えるように変えようとつぶやいた人々が、かえつて神に変えられた事実を知らされるのです。苦難の中にあつてつぶやくしかなかった人々が、神への信頼を回復したのは、苦難が過ぎ去ったからではありません。苦難が軽くなつたからでもありませんでした。ただ苦難の中にあつて、彼らが神に出会つたからなのです。いいえ、彼らが出会つたのではなく、神が自ら困難に直面し恐れる彼らに近づき、出会われたのです。こうして神はおられないとしか思えない状況の中で、人々は確かに共におられる主を確信したので

す。その確信は一度持てば保たれるというものではなく「朝ごとに新たになる」とありますように、ともに神を見失いそうになる人々と共にいる神が日々、新たに民に出会い慈しみと憐れみとを絶えず注いでくださるのです。

迫害の中にあつて「どうして」と叫び続けた人々は、どのように変えられていったのでしょうか。御言葉に

聞いてまいりましょう。人々は迫害から逃れたからではなく、その最中であつて主の慈しみと憐れみを確信し、それらが「朝ごとに新たになる」と言っています。このように困難の中にあつて、救いへの確信に至つた理由が、33節で次のように明らかにされています。「人の子らを苦しめ悩ますことがあつても／それが御心なのではない。」ここに明らかにされているのは、直面する困難が、悲しみや苦しみと神の御心なのではない、という確信です。

私たちは困難の中で、その困難にのみ目を向けて恐れ、不安になることがあるものですが、それが神の御心ではない。つまり、神の御心は直面する困難に、悲しみや苦しみの要因となるものにあるのではないというのです。困難に直面する時、それだけに目が奪われてそれをすべてとし、いつまでも続くもののように判断してしまいます。しかし神の御心は別のところにあるというのです。

もちろん、人々はこの結論に一定飛びに至つたわけではないでしょう。その間にあつたことが重要なのだと思ひます。それは25節と31節に見ら

れます。25節で「主に望みをおき尋ね求める魂に、主は幸いをお与えになる」と、主なる神は人々に対し三人称で語りかけています。ところが31節では「主は決してあなたをいつまでも捨て置かれはしない」と、二人称単数で呼びかけているのです。人々に対して「彼ら」と三人称で語りかけた神、つまり人々に対し少し距離をおいて、広くより多くの相手に一度に語りかけた神でしたが、続いて二人称しかも単数で、つまりあなただけに向かつて語りかける神すなわちあなたに近づき、出会う神となられたのでした。

苦難の中で神を見失い「どうして」と叫ぶしかない、私たちが苦難の中にあつても共におられる主に出会つて新たに生きるために、苦難の中で神はあなたに近づいてくださっているのです。この主に出会つて困難に直面する私たちは、神が共におられ慈しみと憐れみを注がれる、ここに本当の御心を知るに至るのです。こうして私たちも朝ごとに、礼拝のたびに御言葉によって新たにされ、主と共に安心して生き始めることができるのです。(聖霊降臨後第5主日)

○田○子さんを覚えて

佐藤和宏

○田○子さんが初めて、藤が丘教会にお電話くださったのは、昨年の6月頃だったと思います。「川崎市の姉の所にまいりましたので、そちらの礼拝に出席したいと思っております」。その後1、2度、お電話で「暑くなつて来たので、秋になり涼しくなつてお訪ねしたい」とお話しされていました。その8月、事務局から「訃報」のメールが届き、○田○吾先生が召天されたことを知りました。早速、○子さんのお姉さんのお宅にお電話を差し上げ、「何かお手伝いできることがあれば、言ってください」とお伝えしました。そして、ご自宅にてご葬儀をすることになりました。



●○子さんの居室に飾られた○田○吾先生（前）と○子さん（後）の写真。
昨年8月、施設から面会が許され、○吾先生が亡くなる3日前に撮った、最後の写真。

静岡県にある日本福音ルーテル光教会は、藤枝教会、島田教会、焼津教会が合同してできた教会です。重富克彦先生が栄光教会から当教会へ来られましたから、ご存知の方も多いでしょう。旧教会はそれぞれ「礼拝堂」として、礼拝を継続しています。○田○吾先生は定年後、島田礼拝堂で牧会委嘱を依頼され、3年過ぎられました。1996年のことですから、重富先生が栄光教会牧師として、○田先生を招かれたことがわかります。牧会委嘱の任を解かれた後も、島田礼拝堂の会衆としてご夫妻ともに信仰生活を守られました。○田○吾先生のお名前を、私は不思議なことにフルネームで覚えていきます。お会いしたことがあるのかどうか、定かではありませんが、どう

したとかお名前ははっきりと覚えていたのです。ですから○子さんから初めてお電話をいただいたときも、「○田○吾先生はお元気にされていますか」と、躊躇なく尋ねたほどでした。後日、○子さんを訪問した際にお聞きしたところ、「佐藤先生（私の父、邦宏）と仲が良かったのよ」と教えてくださいました。おそらく私が幼いときに、家を訪ねてくださったのでしょう。また、先生が話題に上り、幼い私はそのお名前を覚えていたのでしょうか。

○田○吾先生は大柄な方であったようですが、この数年、○子さんが介護しなければなりません。ただでさえ大変な介護ですが、大柄な先生を小柄な○子さんが介護することは、それに加えて重労働でした。それを見かねたお姉さんが川崎市の自宅の近くに施設を探して、そこに先生を入所させ、○子さんをご自宅に迎えたのでした。「これで○子も、いつでも会いに行けるし、自分の時間も持てる」と思っていたとお姉さんが話してくださいました。

ところが新型コロナウイルス感染症拡大により、面会するにも制限が

加えられ、望んだように面会することはできない日が続きました。そしてそのような中、昨年の8月に先生は召天されたのでした。施設との契約によりコロナ禍にあつて最後の別れをすることも許されず、ご遺体はそのまま火葬され、数日後遺骨となつて戻って来られる日に、ご自宅にてご葬儀を執り行いました。このような体験からでしょう。訪問するたびに、○子さんは「私は直葬にしてください。施設から火葬場に連れて行ってください」と仰っていました。その時いただいたメモには「できる早く納骨をしたい（原文のまま）」と残されています。弟さんと相談をし、7月14日に小平墓地にて、○吾先生のお隣りに納骨される予定です。

○子さんのご葬儀は身内のみで、斎場にて執り行われましたが、式の直後にご友人の小○枝さんの「感謝の言葉」をお読みしました。その文章から○子さんが気さくで、前向きで、配慮が行き届いた方であったことが伝わってきます。また次のようにありました。「お体は小さかったけれど心はおおらかで泰山木や木

蓮など大きな花がお好きでしたね」。
私が訪問する帰り際に、「好きな花があるんですよ」と言われ、見せてくださったのは施設の庭にある「白熊の木」と言われる大きな木でした。「部屋からこの木が見えて、幸せです」とも言われていたのを思い出しました。

さらに小○さんの言葉は、○野○江さんを含めて3人で世界キリスト教協議会の婦人会議に出席するため、韓国に行かれたことに触れられていました。○子さんをお訪ねした際、この韓国への旅のこともお話くださり、「○野○江さんにお世話になった」と言われていました。○野○江さんに○子さんのことをうかが

うと、次のように話してくださいました。「私にとって小○○枝さんは『エリサベト』のような存在。何か困ったことや嬉しいことがあると、いつも聞いてもらっていた。(注ルカによる福音書1章39節以下。受胎告知を受けたマリアは、急いでエリサベトを訪ねたという記事がある。)そのように○枝さんにお話しすると、『それじゃ私にとって「エリサベト」は、○田さんだわ』と言われた」と。このような3人の方のつながりに見えるように、また重富先生とのつながりに見えるように、神さまは実に不思議な方法で私たちをつなぎ、また私たちを会わせてくださるのを改めて感じました。



●篤子さんの居室から見る「白熊(ハグマ)の木」

小泉さんの言葉に「大きな花がお好きでしたね」とありましたように、この4-5mほどの大きな木がお好きでした。特に先にある赤っぽい花(円内)のふわふわとした様子を好んでおられました。

○子さんは、転入(昨年12月20日)以前に「死と葬儀のための意思表示書」を提出されていきました。それによると、好きな聖句は「汝ら世にありては患難あり、されど雄々しかれ。われすでに世に勝てり」(ヨハネによる福音書16章33節・文語訳)。「わが世にあらん限りは必ず恩恵(めぐみ)と憐憫(あわれみ)と我にそひ来らん」(詩篇23篇6節・文語訳)。

○田さんのこと

山○子

○田○子様のご召天に接し、心から哀悼の意を捧げます。

○田さんのことは、私自身あまり存じ上げないのですが、藤が丘教会に來られた時に交わした会話が、とても印象的だったので、ご紹介させていただきます。

○田さんが初めて藤が丘教会に來られた時のご様子は、控えめでニコニコされていて、優しそうな牧師夫人という印象でした。その後、転入されて、ある時、私がたまたま駅まで車でお送りした時でした。○田さ

選んだ理由は「共に、このみことばに導かれて歩んできたため」とあります。

御言葉に導かれ、それだからすべてを前向きに生きられたその生涯を終えられた○子さんの終わりのときに出会い、短い期間でしたが寄り添うことができ、感謝いたします。(尚、本稿執筆のため、○野○江さんにお力添えをいただきました。感謝)

んが、「この教会には重富先生がいらしたでしょうか？」と尋ねられたので、「はい、重富先生がうちの教会に來られて、私が先生から受洗した第一号でした。先生から聖書もいただきました！」と答えると、目をキラキラ輝かせて、「そうなの?!重富先生とは親しくさせていたでいたのよ。もう一度お名前を聞かせて? そういう方が教会にいてくれて、本当に嬉しい。」と言って下さいました。○田さんがとても喜んでくださったので、私もとても嬉しくなり、親しみを覚えました。

私は、すぐまた教会でお話できるだろうと思って、再会を楽しみしていたのですが、その後、教会に來ら

れることはありませんでした。ただ、施設では元気に過ごされていらつしやると思っていたので、今月になって佐藤先生から○田さんの容態が悪いと聞いた時には、早く会いに行けばよかつたと、内心、後悔いたしました。ハープをもつてお見舞いに行きたいと思ひ先生にお伝えしたら、すぐに施設に確認してください、翌日伺うことになりました。

施設での面会では、まず、先生が聖書を読まれ、語りかけ、お祈りをして、次に私がハープを弾かせていただきました。○田さんはその間、ずっと静かに寝ておられて、苦しい表情もありませんでした。ですので、翌日亡くなられたと聞いたときは、本当に驚きました。

○田さんは牧師夫人として牧師を支え、深い愛情で教会のために尽くしてこられたと聞いております。きつと今は、主に召されて、先に亡くなられたご主人と再会されていることと思います。

どうぞ神様、あつい信仰を持ち続けた○田さんに永遠の安息と平安を与え、あなたの光の中で憩わせてください。アーメン。

初めまして！

自己紹介②

○藤真○

沖縄の民意を無視した辺野古埋め立てが臆面もなく続き、原発事故により多くの方々が依然として避難生活を強いられ、子どもたちの健康被害が進んでいる現実、広島・長崎・福島を経験してもなお核を否定しない政府、また非正規労働者の増加により若者が未来に希望を持たず、社会には格差が広がり、コロナ禍でさらにその状況に拍車がかかっている・・・そのような日本社会の、また日本にとどまらず世界中に広がる、とても暗闇に目を向けると、なすすべを知らず、ただ茫然と立ち尽くすだけの自分を発見します。

でもそんな時、思い出す言葉があります。敬愛する東風平京子先生の言葉です。「私たちは祈り続け、その祈りの中で神様が示してください。道を進めばいいのです。祈るだけでいいのかと言う人がいますが、まず祈ることです。祈りはすべての原動力です。」そして同時に心に浮かぶのは、沖縄の方々の、決して諦めず、

屈しない、強くしなやかな生き方です。沖縄の歴史がそのことを語っています。魂から発せられる歌と踊りも、その姿勢を根底で支えているように私は感じます。

希望を失わず、平和を目指して生きることは決して生易しいことではありません。しかしキリストに救われ、キリストに生かされている私たちは、その務めを託されています。(第二コリント5章18節) 小さな私ですが、東風平先生の言葉と沖縄の皆さんからエネルギーをいただい

て、主が示してください。平和への道を歩み続けたいと願うものです。平和の架け橋である沖縄の皆さまの上に、世界中の平和を創り出す人々のように。」

長くなりましたが、最後に私の好きな言葉の一つを紹介させていただきます。「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし成長させてくださったのは神です。」コリントの信徒への手紙一 3章6節 (完)



今月の受洗記念日の皆さん

6日 ○田由○子姉 23日 ○野○子姉
25日 ○井○子姉、○尾○子姉
30日 ○坂○美姉

おめでとうございませう。



「あなたの御言葉は、わたしのものとなり
わたしの心は喜び躍りました。」エペソ書15章16節
福音伝道ウェブサイト <https://www.jcfc-japan.org/>
フェイスブックで毎日のライブ中継をしています。(毎日朝11時-10時半)

Be GOD with You!, and Me!

石田 とも子

このいつまで続くのか分からないコロナ禍の中で、私自身が日々「不安と怖れ」を感じながら過ごしています。頭で理解しようとする私は、思わず「この長く続くコロナの状況で、人々が苦しんでいます。神様、どうして?」と問いを発してばかりです。しかし、いくら問うても、愚かな私には分からないことだらけ。正直、色々な思いが空廻りして、私の信仰は揺らいでいる状態なのです。

返って相手に迷惑となってしまう怖れがあります。残されたことは、時折の挨拶がてらの何気ないメールと、そして彼女のことを思い、彼女を支えて下さるよう神様に祈ること。私にはそれしかできませんでした。

彼女は幸い、あまり症状が出ないままPCR検査で陰性となり、帰省の目途も立ちました。

頭でっかちで戸惑ってばかりの私ですが、このことで「どんな困難の時・辛い時でも、彼女と、またコロナ・その他の辛さを抱える世界中の方々と、そして私と、神様は共にいて下さる。一人ひとりに寄り添い、支えて下さる。」と言うことを信じて、地道に祈ってゆくことを教えられました。

最後に「世界中の人々が安心して生活し、自由に行きたい所に行き、会いたい人に会える、そんな平穏な日々が早く訪れますよう、」祈っております。

■教会の動向



6月、藤が丘教会では、柏田篤子さんが11日に、竹村陽子さん14日にそれぞれ召天されました。ご家族の皆さんに、主の慰めがありますようお願いいたします。柏田篤子さんについては今月号で触れました。竹村陽子さんについては次月号にて、数名の方よりお言葉をいただければと思います。



5月末より、拡大宣教委員会を継続して開催しています。ここからはその件について、簡単に報告したいと思います。

東教区では今後10年で11人(約3分の1)が定年退職することが予測されています。すでに他教区では牧師の不足状態が続いておりますので、今後補充が困難と予想されます。それに向け、私たちは地区や近隣の教会との協力等が欠かせない状況にあります。

しかしただ将来に備えて、と他教会との組み合わせを考えるだけでは、問題の根本的な解決にはなりません。

そこで拡大宣教委員会では、第一に教会の宣教について確認しました。宣教とは、使命(神に遣わされた目的)という意味になります。しかしそれは結果(人が増えた、財政が安定している等)によって評価されるものではありません。教会の使命を果たそうとしているかという姿勢が問われるものです。委員会では具体的に次のように共通認識を持ちました。「宣教(教会の使命、目的)とは伝道、教育、奉仕を通じて神に仕える」ことである。宣教する教会として、私たちは「神が与えた使命を果たそうとしているか。①あまねく福音、信仰を伝えようとしているか。②御言葉に聞き、それを教えるか。③この教会が藤が丘の地に植えられた意味と意義を理解して地域に伝え(貢献し)ようとしているか」に目を向けつつ、ここに示された姿勢を教会宣教の軸足として、今後の委員会では課題に取り組んでまいりたいと思います。後日、皆さんにも説明し、またご意見をいただく機会を設け、皆で藤が丘教会の宣教を推し進めてまいります。(佐藤)